タマゴに目はな

由紀さおり

長尾みのる・絵

毎日新聞社

タマゴに目はな

由紀さおり
長尾みのる 絵

毎日新聞社

タマゴに目はな

一九八九年七月二〇日印刷　一九八九年八月五日発行

著　者　由紀さおり
編集人　沢畠　毅
発行人　川合多喜夫
発行所　毎日新聞社
〒一〇〇―五一　東京都千代田区一ツ橋
〒五三〇　大阪市北区堂島
〒八〇二　北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇　名古屋市中村区名駅

印　刷　大日本印刷
製　本　大口製本

© SAORI YUKI Printed in Japan
ISBN4-620-30690-8

タマゴに目はな——目次

せいくらべ 8
お母さん 12
みどりめそよ風 16
くつが鳴る 20
花嫁人形 24
かたつむり 28
雨ふり 32
つかの間の雨 36
アイスクリームの歌 40
電車ごっこ 44
牧場の朝 48
花火 52
われは海の子 56

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うみ 60
金魚の昼寝 64
月見草のうた 68
虫のこえ 72
月の砂漠 76
みかんの花咲く丘 80
赤とんぼ 84
月 88
恋文 92
村まつり 96
クシコポスト 100
もみじ 104
竹取物語 108

木の葉のお船 112
リンゴのひとりごと 116
風 120
たき火 124
夢のお馬車 128
椰子の実 132
雪 136
ホワイト・クリスマス 140
お正月 144
一月一日 148
富士山 152
ちょうちょ 156
ぺたこ 160

うぐいす 164
春よ来い 168
昭和の子供 172
やさしいおかあさま 176
どこかで春が 180
一週間 184
赤ちゃんのお耳 188
静かな湖畔 192
春のうた 196
夢路より 200
夜明けのスキャット 204
あとがき 208

装画・長尾みのる　装幀・コスギヤエ

タ

マ

ゴ

に

目

は

な

せいくらべ

「まるで卵に目と鼻をくっつけたようだ」

桂文珍さんは、私の顔を称してこう言います。そういえば、〝鶴の卵〟なんて言われたこともあります。〝卵に目鼻〟の私、今週から、真っ白なキャンバスに思いのまま絵を描くよう、心の卵に、いろんな風な目と鼻を書き入れていこうと思います。味わいのある顔ができあがるといいのですが……。

当節は、ひとりっ子の家庭が多いようですが、私は三人きょうだいの末っ子に生まれました。エンジニアの道を進んだ十歳違いの兄、そして今、いっしょに童謡を歌っている元々はクラシック歌手である五つ違いの姉がいます。年齢は離れてはいたものの、〈柱の傷は　おとともの　で始まる端午の節句の童謡〈せいくらべ〉の歌通りの光景が、わが家にもありました。

私は、生まれは群馬県桐生ですが、三歳のときに横浜の鶴見に引っ越してきて、ずっとそこで育ちました。今風にいうなら2DKの借家住まいです。格子戸をガラガラっと開けると玄関。上がったところに8畳の和室、4.5畳の和室、そして板敷のお台所があるだけの家です。当時はうち風呂のある家など稀で、私たちも銭湯通いをしていました。幼ない私にはそれほどの記憶もありませんが、父の仕事が思わしくなく、家の経済状態はそう良くはなかった時期です。まあ、終戦から何年か経ってはいたものの、世の中全体がまだまだ貧しかった時代でもありました。

そこには、私の家と同じような家作が、井戸を囲むようにコの字形に並んでいました。家の中にい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ても、おかみさんたちの井戸端会議のさんざめき、それに、どの家にも私と同じような幼ない子どもがいて、その子どもたちの「遊びましょ」「後で」とか、鬼ごっこの「もういいかい」「まあだだよ」なんて声も聞こえてきたものです。そんな生活の雑音をBGMに、台所で働く母の背中を見ながら卓袱台の上でぬり絵をしたりして遊びました。

〈せいくらべ〉用の柱は、その台所と和室を隔てている柱でした。母に「柱に傷をつけちゃあダメよ」と叱られながら、こっそりとやってしまうのです。兄など、コンパスの針の先でギギッと印をつけてしまいます。私はまだまだおチビさんで、和裁をやっていた母の鯨尺より小さい、と兄にからかわれたことを覚えています。

私が歌の道へ進んだのは、偶然といえば偶然です。家のすぐそばに小学校がありました。その小学校の講堂が、あとで私たち姉妹が入団することになる「ひばり児童合唱団」の練習場となっていました。桐生にいた頃から声の良さをほめられていた姉は、その練習風景を窓の外からいつも見ていて、暗くなって夕飯どきになっても帰ってきません。その熱心さに根負けして、両親は姉を合唱団に入れました。姉の練習についていかなければならない母は、幼ない私ひとりを家に残しておくわけにもいかず、私も連れて行きます。〝門前の小僧〟で、習わなくても覚えて家で歌ったりするものですから、それなら、と私も合唱団入りしてしまったのでした。五歳のことです。ひばり、かなりや、すずめ組とあるうち、一番年少組のすずめ組でした。でも、合唱団にいた頃は、私は姉たちの〝にぎやかし〟で、楽しんでいただけのように思います。

姉妹は長じて、歌の道に進みますが、ジャンルが違いました。姉はクラシック音楽、妹はポピュラ

ー。実生活での〝せいくらべ〟が始まっていました。当時は、クラシック音楽と大衆芸能の社会的位置づけは天と地ほども違いました。そんななかで、私は負けまいと一生懸命つま先立ち、背伸びをし続けました。

かかとをおろし、まさに地面に足を着けて歩めるようになったのは、つい最近のこと。それぞれの道に精進した分、お互い相手を認める余裕、やさしさができたのだと思います。

八八年大相撲春場所を、私はハラハラしながら見ていました。藤島部屋の貴花田と若花田のことが気がかりだったからです。ご存じのように、ふたりは藤島親方のお子さんで、この場所に同時に入門した二歳違いの兄弟です。兄弟がプロとして同じ道を歩む。どうしても私たち姉妹と二重映しとなってしまいます。音楽と相撲、土俵こそ違うけれど、〝勝負〟の世界です。兄も弟も、姉も妹もありません。

いつだったか、TVのトーク番組の司会をしていたとき、親方の奥様・花田憲子さんをゲストとしてお迎えし、苦労話などうかがったことがありました。過酷な〝せいくらべ〟をしなければならない姉妹を持ってしまった私の母の苦労を知っているだけに、今度は、憲子さんの姿が母のそれと重なって……。

私たち姉妹は今、やっと手を取り合い同じステージで、歌う心は同じ、と童謡や唱歌を心から楽しく歌っています。あの兄弟にもつらい時期がきっとあるでしょう。でも、いつの日か必ず、しみじみ酒をくみかわす時が来ると思うのです。

せいくらべ

お母さん

映画やテレビのドラマで、母親役を演ることが多くなりました。

最初は、八三年、森田芳光監督の『家族ゲーム』だったと思います。その後は、いろいろ。NHKの朝の連続テレビ小説『チョッちゃん』のチョッちゃんのお母さんやら、テレビドラマ『中卒・東大一直線』という中学校を卒業したあと、資格検定を受け、高校へは行かずに東大を目指す息子の母親、かと思えば不倫につっ走ってしまう母親を演りました。

私は、こういった母親役をかなり楽しんで演っています。おそらく、実生活では母親になれなかったからかもしれません。実際に家に帰ればお母さん業をしなければならない女優さんだったら、仕事場でも母親役なんてウンザリかもしれませんから。

タイプはさまざまなのだけれど、どんなお母さんを演じる時も、私が心の底に描く母親像は、たったひとつ。それは、「ただいま」と家に帰ってきたときに、「おかえりなさい」と必ず返事をしてくれる母親です。つまり、ほかに特に何もしてくれなくても、とにかく、家にドッカリといるというイメージが私の母親像ってわけです。

そんな風に思うのは、私の母がそうだったからだと思います。「ただいま」と帰ると、必ず「おかえり」の声がして、家にいるのがあたりまえの母。だから、返事がないと不安で不安でたまりません。探しまわって、結局、お隣りへ回覧板を届けに行っていただけだったりするんですけど……。

〈お母さんてば、お母さん　と何度もお母さんに呼びかける童謡があります。〈何にもご用はないけれど、なんだか呼びたい　という歌です。私、母親って、これだって思うのです。〈お返事なくても、うれしいな　と子どもはお母さんがそこにいるだけで満足しちゃうのですから。私が母親になるとしたら、母と同じような、そして、この歌に歌われているようなお母さんになりたいとずっと思ってきました。そうでないお母さんなら、意味がないと。

二十代後半から六、七年重苦しい時期がありました。ピチピチと若い娘でもなく、かといって自然な色気のにじむ女性にもなりきれない中途半端な年頃です。そんなとき、赤ちゃんを産んでお母さんになる、ということは、当時の私にとって、考えられうる道の中で、最も手近かなものでした。でも、パスしました。私は、私のお母さん像にずっと留まっていられる女ではない、と悩みに悩んで結論を出したからです。

この結論、間違っていなかったようです。『中卒・東大一直線』のとき、私は五人の子どものお母さんでした。末っ子を演じる子役の子どもが四つか五つで、とても私になついてくれていました。朝、収録のためスタジオに入ると、「お母さぁーん、お早よう」と飛びついてきますし、収録の合間も、「お母さん、お母さん」とまとわりつきます。ところが、夕方、仕事が終わりますと、その子は「お疲れさまぁ」と元気よく、さっさとスタジオを出ていくのです。私、つくづく思いました。ああ、これだから、母親役を楽しんでやっていられるんだな、これが実生活の母親だったら、子どもは「お疲れさまぁ」って帰っていってはくれないものなぁ、と。

八十年代は女の時代といわれてきました。主婦もパートに出たり、カルチャーセンターに通ったり

と外へ出歩くようになっています。昔と違って、子どもが四人も五人もいるわけではないので、三十代で子どもに手がかかる時期は卒業してしまいます。それに、床柱や廊下を磨きあげる必要もなく、一日一回、シューッと掃除機をかければいいだけの生活。「女がえり」で、もうひと花咲かせようという主婦の方が増えているようです。

でも、よくいわれる〝子どもの手が離れる〟って、いつのことをいうんだろって、私は思ってしまうんです。ミルクを与えなくてよくなる時期？　小学校へあがる時期？　私には、子どもが母親の手を離れるなんて時は、そう早くはないように思えるのだけれど……。

私は今、童謡や唱歌を主に三世代の方々に向かって歌っているつもりです。私と同じように童謡を聴いて育った世代、私よりご年輩の方々、そして、ヤングママさん。お子さんに、歌ってあげてほしいなあ、と思って。お母さんの歌う響きって、子どもにとっては安心するものですから。子守り歌でもねんねん、のリズム感がいいんじゃないでしょうか。

でも、最近、私は？？？と感じることが多いのです。たとえば父親となったばかりのスタッフに、どんな子守り歌を聴かせているのかと聞いたところ、「聴かせません。普段が音がありすぎるので、音をなくして静かにしないと眠らないので」とのこと。

私の童謡アルバムも、どんな風に聴かれているのか不安になります。もしかして、子どもの枕元でレコード回しているだけだったりして……。お母さんてば、お母さん！

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com